

33. 『農具便利論』の世界(1)

都市近郊でかつての幹線交通路淀川沿いの摂津市域は、江戸時代から農村であっても田舎ではない。『農具便利論』の工夫に満ちた農具は摂津の民具に継承されている。

日本初の農具の専門書

大蔵永常(1768~1860)は、宮崎安貞、佐藤信淵と並んで江戸時代の3大農学者といわれる。大分県日田の農家の出で、九州・近畿・関東各地を見聞し、近畿の工夫をこらした農具を広めて農家に省力化を勧めようとした。宮崎安貞の『農業全書』以来、農業技術書は数多く出版されたが、農具に焦点をあてたのは『農具便利論』が初で精確な図入り。

大坂で出席

A の右は『農具便利論』の表紙。江戸時代の出版文化の中心、大坂からの出版。

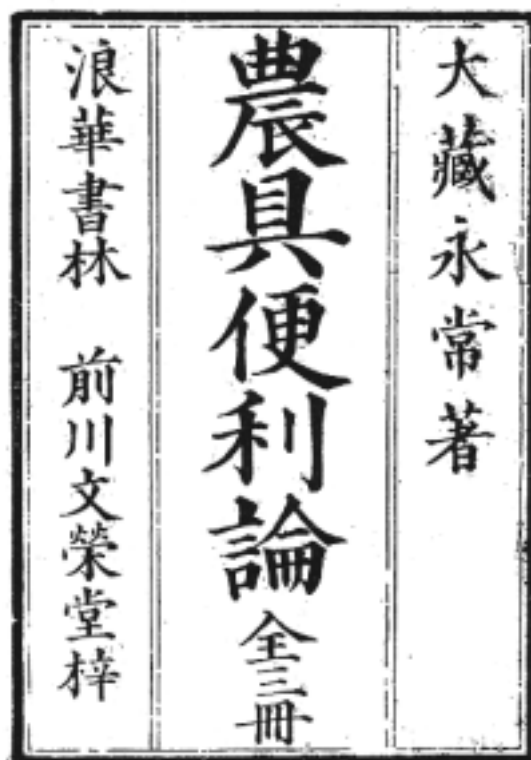
A の左は巻末の広告ページで大蔵永常の作品群。琉球蘭(いぐさ)・綿・甘蔗(さつまいも)などの専門書が見え、農家の現金収入の向上をはかった意図が読み取れる。

元祖カタログ商法

D は『農具便利論』巻末の農具の値段表。40品目の値段を掲げたのは「大坂南久宝寺町中橋南へ入東側 農具取次 扇屋重兵衛」。このリストで欲しい農具があれば「扇屋重兵衛方まで仰せつかわれ候はば、調べ進ずべく候」という。カタログ販売である。

A

黄京園大蔵永常著述蔵版目録			
豊稼録	同附録	同後篇	農家益
受和園蔵 全一冊	全二冊	全二冊	全三冊
甘蔗大成	綿圖要務	琉蘭百方	同後編
全二冊	全二冊	全一冊	全二冊



源五兵衛からすき

B 『農具便利論』の「源五兵衛からすき」で麦の谷を鋤いて、両側の畝に土を寄せるのに鍬より深くきれいに能率よくできる。野菜畑にもよい。京・大坂辺でよく使うという。江戸時代中期の源五兵衛さんのアイディア農具であろうが、すでに 2 連式もあった。

C は床長 44cm、柄は 138cm。資料カードではニチョウガケだが、刃先は 2 連になっていない。ゲンノミ（鳥飼上）、ゲンゴメ（鳥飼下）はゲンゴベエの変化形であろう。

